

渡辺克己 著

豊後の
武將と合戦

【第十一章】大友宗麟の日向遠征 ②



●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5 版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000 年 2 月 15 日

定価：2300 円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 [Web ページ](#)

※奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

目次

【写真】大友宗麟肖像画

第十一章 ●大友宗麟の日向遠征 ②

⑥ 軍議は決裂

⑦ 小丸川決戦の大敗北

⑧ 敗戦と神父たち

⑨ 空腹の逃避行

⑩ 敗戦後の難題



大友宗麟肖像画

⑥ 軍議は決裂

— 「上様にご運も見えた」 —

先にも述べたように、大友の有力な諸将は、宗麟が家臣の反対を押し切って強行した日向遠征には、いわばあきらめの思いを抱いて従軍しており、いさぎよい死に場所を求めているほどだから、周到な作戦を軍議で練ることは期待できない。

両軍が戦端を開く十二日の前夜、大友方は諸将が会して軍議を開いた。しかしたちまち決裂してしまったのである。

責任者である軍師の角隈石宗（つのくませきそう）が、まず慎重な行動を求めて、

「敵の様子をうかがうに、わが方から渡河して攻めかかるのを待っていると見えた。敵の手にかつに乗ってはなるまい。先に河を渡った方が負けるは必定」

というのに対して、田北鎮周（しげかね）は、

「敵が動くのを、手をこまぬいて待つておるようではおくれをとる。よろしく先手をとって攻めるべきである。明早朝に渡河を決行し総攻撃を…」



と言いつ張った。一步も譲らない気色である。鎮周に捨てばちな思いがあることは、石宗も諸将も読みとっている。しかし軍師の石宗はあくまで周到な作戦に諸将を誘導する責務がある。

「肥後廻（まわ）りを

している南郡衆との呼応も考えねばならぬ。南郡衆が敵の背後を衝く戦略であるから、その着陣の知らせを待つて、全軍の行動を起こしても遅くはない」

と、説得につとめた。すると、佐伯宗天が口を挟んだ。

「上様（宗麟）に、この地までお越し願って指揮をとっていただくことはならぬか。務志賀（むじか）で祈祷（きとう）ばかりしておられるようでは全軍の志気はあがらぬ。同じ討ち死にするにも、殿のご馬前なら、死にがいもあるというもので。紹忍殿、務志賀の御旗本へ使いを走らされてはいかなものであろう」

多分に皮肉をこめたものである。

ここで他の将たちも、それぞれこの際、言いたいことを言おうと、口を出しかけた途端に、田北鎮周が、にわかに座をけて立ち上がった。

「おのおのがたも、こたびの戦いについて腹を決めておられることござろう。各自、思い通りになさるがよろしかろう。この鎮周も、勝手をさせていただく。明朝、一番駆けをして、討ち死にしてお目にかける」

と言い、一同に別れを告げるように一礼して、自陣に帰って行った。石宗は嘆いて、「死ぬ覚悟で軍法に背くなら、いかな戦術も無益である。上様にご運も見えた」

総指揮者の田原紹忍は、なす術（すべ）もなく軍議は決裂した。

この夜、田北鎮周の陣では、家来を集めて早速酒盛りを始め、「明早朝、諸軍に先立って河を渡り、敵陣に斬（き）り入るにより、一同遅れず供をしてほしい」と言い渡した。

この酒盛りで、田北家秘蔵の「小烏（こがらす）の鞍（くら）」を取り出し、これを破って薪にし、酒を温めさせた。黒漆の地に金粉で小烏を蒔絵（まきえ）にした名作の鞍で、田北家の守護神黒烏八社大明神（直入町下田北字仲村に鎮座）の、烏をかたどったものといわれる。

家来が驚いて、「ご秘蔵の名作の鞍を…」といふかると、「いかなる名作の鞍も、これに乗る者の命あつてのことよ」と、笑つて酒を一同にすすめた。

佐伯宗天は、慎重論の方であつたが、自陣に帰つて、子息の惟真、鎮忠の兄弟や家老を呼び、軍議の模様を説明し、「こちらから渡河して戦いをいどめば負けるに決まつておるが、田北鎮周殿だけに戦わせるわけにはいかぬ。我らも討つて出よう。豊後を発（た）つ時から死ぬ覚悟であつた。豊後のさむらいの、いさぎよさを薩摩の者どもに見せようぞ」と、決意を語り、出撃の手はずを整えさせた。

⑦ 小丸川決戦の大敗北

— 三千余の将兵が散る —

軍議もならず、自軍が支離滅裂状態で、敵主力と戦うことになつたのに対して、総指揮者田原紹忍は、責任上どのような動きをしたのか。本来なら、各武将の陣営を駆け回つて、策の立て直しに、ひぎを屈しても説得に努めるべきだが、彼は何もできなかった。ただ呆然（ぼうぜん）として、武将たちのなすがままにしていたのである。彼は既に諸将から見放されていることを知っていただろうし、それをばん回する器量もなかった。

その夜、悲壮とも言うべきハ
プリングがあった。軍議決裂を
聞いた血気盛んな三人の武者、
臼杵惣右衛門、柴田何右衛門尉、
斉藤進士兵衛尉が申し合わせ、
「明日の負け戦に、みじめな死
にざまをみせるより、今夜男ら
しく討ち入って死ぬるが花よ」
と言い残し、三騎くつわを並
べて川を押し渡り、敵陣を騒が
せたあげく斬(き)り死にした。

かくて十一月十二日の暁を迎えた。現代の暦で言えば十二月
中旬である。日向は南国といえども既に初冬である。太平洋か
ら吹き上げてくる冷たい川風は小丸川の夜のとばりを吹きはら
い、流れが見え始めた。

突如、下流に当たって水しぶきが上がり、瀬を横切る一軍。
田北鎮周(しげかね)の率いる将兵二千五百余騎であった。鎮
周は約束どおり、一番駆けで、川近くに布陣している敵陣にお
どりこんで行った。

続いて上の瀬を、黒い一団となって渡河したのは、佐伯宗天
の軍勢二千余騎であった。田北勢に遅れるな、とばかり敵中に
突入して行った。

田北、佐伯二軍の渡河につられるように、斉藤鎮実、吉弘鎮信、
臼杵鎮次、木付親慶、そして軍師の角隅石宗ら、大友の本隊主
力はすべて渡河したが、作戦も各隊間の連携もないから、てん



でんばらばらに戦いをいどんで行ったかつこうである。

早朝の渡河戦も予想して、鉄砲隊を前面に配置するなど、陣備えを固めていた島津の大軍がこれを迎え撃ったのだから、勝敗の行方はあきらかである。さらに、高城の守兵が、どっと城を出て大友軍の背後を突いた。たちまち大友勢は混乱し、総崩れとなった。

この小丸川渡河戦で、討たれた大友の将兵は三千余といわれる。もちろん田北鎮周、佐伯宗天ほか右にあげた大友氏にとって有力な武将たちは、華々しく戦死した。

田原紹忍は本陣を動かず、川向こうの戦況を見ていたが、味方が崩れかかったと見ると、慌てふためいて逃げだした。

イエズス会の司祭ルイス・フロイスの著した『日本史』（松田毅一・川崎桃太郎訳）には日向合戦の模様を記しているが、小丸川渡河戦で討ち死にした武将たちがキリシタン嫌いであったせい、この敗戦の原因を「各指揮官は、統率と果敢な精神に欠け、個々別々で相互協力がなかった」と冷ややかに批判している。特に、田原紹忍については、次のように完膚なきまでにけなしている。

—その性格は、驚くべき憶病と軟弱であり、戦場では、槍（やり）や刀の音、鉄砲の轟音（ごうおん）、襲撃する者どものかん声を聞くと、ふつうの武士なら真つ先に立ち向かい、味方の救援に赴くべきところを、心の底まで下賤（げせん）で恐怖心にとりつかれた彼は、巨体（の持ち主）の身を驚くべき速さで逃げ出し、鉄砲の音が聞こえない安全地帯へ逃げ込んだ。彼は恐怖のため、脇道（わきみち）に入って血尿を催したほどで

ある。敗戦後は、彼は行方不明となったが、彼の臆病な人物を知る人々は、その戦死を信ずる者はなかった――。

と、さんさんである。総指揮者が逃げ出し、主な武将が戦死したので、大友勢はすっかり戦意を失い、雪崩をうって敗走に転じた。これを追撃する島津勢に討たれ、高城から耳川までの間を、戦死者で埋めた、といわれている。

⑧ 敗戦と神父たち

―― 宗麟に冷静な進言 ――

小丸川の決戦で大敗北となった大友勢の戦死者総数は二万余と伝えている。日向に直接南下した大友勢主力は四万余といわれているから、その半数は日向に屍（しかばね）をさらしたのである。

島津方の武将から見ると、大友方の諸将は、いたずらに死を急ぐ戦いぶりと見えたであろうか。哀れを催したものとみえる。後日談になるが、高城の城主山田新介有信は、天正十三年（一五八五）に、高城の対岸台上（児湯郡川南町）に、自軍の敗死者に大友方戦死者を加えて供養塔を建立して菩提を弔った。

この供養塔のある地帯を、現在も敗者大友宗麟の名をとって宗麟原（別名カンカン原）と呼んでいる。

勝利を信じ、五ヶ瀬川の北岸務志賀（むじか）で、礼拝に明け暮れていた宗麟は、夢想にもしなかった全軍総崩れの知らせに色を失った。このときの宗麟の対応ぶりについては、『大友興廃記』『大友記』とも、ごくあっさり片づけ、敗戦の批判の方に言葉を多く費やしている。

『大友興廃記』は「務志賀の御旗本も十四日に引き給う」とし、このたびの御弓箭万事不都合にして、おくれを取り給うこと、年ごろの行いに依って、天これを罰し給うとぞ見えける」と、敗戦は天罰であったと冷やかだ。

『大友記』は「早々府内に御帰陣まししけり」と片付け、つづいて「君に諫言無ければすなわち君その国を失うといえり…屋形様天理にそむかせたまひ、御運も末とぞ見えし」と述べて、大友の将来を嘆いている。豊後の守護らしからぬ狼狽(ろうばい)ぶりや、みじめな逃避行は記しなくなつたのかもしれない。

傷付き疲れ切つて、続々と逃げて来る兵たちの姿を見て、宗麟や近従の者たちは、今にも島津の軍勢が襲つてくるかと、あわてふためき逃げ支度にかかった。見苦しい姿であつたのだ。

このとき、事態を冷静に判断して、落ち着かせようとしたのは宣教師であつた。宣教師たちは、布教のため生命の危険を冒して海外の異教の民の中に身を投じている人たちだ。危急の場合の処し方が違う。

旗本に駆けつけたカブラル神父が、宗麟に進言した。

「逃げて来た兵たちの話を総合すると、敵はまだ一日旅程も後方に居ると判断しました。ここは落ち着いて、逃げて来た兵たちを取りまとめ、整然と後退した方が安全ではないでしょうか」



「うむー」

宗麟は、あわてた自分を恥じた体で、腕を組んだ。そして言った。

「そのとおりだ。――夜が明けてから、まず妻たちを先に後退させることにしよう。あなたたちもこれに同行するよう、準備をすすめられよ」

落ち着きを取り戻した様子の、宗麟の言葉を聞いて、カブラル神父たちは、教会に引き揚げた。

ところが事態はまた急迫した。カブラル神父は深夜に教会の戸を激しくたたき音に起こされた。宗麟の使いの者であった。

「ただ今から豊後へ向けて出発するから、神父さまたちも、一刻も早くここを発つようにとのお言葉にござります」

続々敗走してくる兵たちの動揺が激しく、恐怖におののいて騒ぎ立てるのに巻き込まれて、宗麟は再び我を失い、明日を待つておれなくなったのだ。

カブラル神父は、使いの者に聞き返した。

「では、お屋形さまは、もう出発なされたのですか」

「はい。――奥方さまや近従の方たちと、身一つでおたちになりました。たちぎわに、神父さまに次のように伝えよと仰せられました。――戦いには負け、多くの武将を失ったが、あの武将たちは、私がキリシタンへ改宗するのに反対した、聖なる教えの大敵であった。彼らをこの戦いで除かれたのは、主のおぼしめしであり、喜ばしいと思わぬでもない。ものは考えようである――」

これは敗戦の驚愕（きょうがく）と混迷の中で行き着いた宗麟の自らに与えた結論であったのだ。

⑨ 空腹の逃避行

— 神に授かった雑炊 —

深夜にわかに逃避行を告げられた宣教師たちは、急ぐあまり、何もかも放置して出発しなければならなかった。府内から持参していた貴重な祭器類はすべて置いて行った。また教会堂は、敵の手に汚されたくないので、火を放って行くつもりであったが、それもあわてて出発したため果たせなかった。道中の食べ物、の支度をする余裕もなかった。着の身着のまま山道づたいの夜道を、宗麟一行のあとを追って急いだ。

宣教師たちを、あわてさせたのには理由があった。置き去りにされた場合の怖い相手は、敵よりも敗残の大友軍の兵士たちであった。彼らは、この戦いを宣教師のせいにして憎悪心をつのらせ、ののしりわめいていた。身の安全が保たれているのは宗麟の目の届くところに居たからだ。置き去りにされたら、いつ殺されるかわからない、という恐怖心に宣教師たちはとりつかれたのである。

夜が明けて、その日のうちに、宣教師たちは宗麟一行に追いつき、ほっとしたが、沿道の民家は焼かれているので休むところはなく、十一月の寒空のもと、空腹と疲労にさいなまれた。

逃避行の最初の夜、宗麟は、自分と家族たちのために、笹（ささ）竹を集めて小屋を造らせた。またその近くに、宣教師たちのための同じような小さな小屋を造らせた。それは「夜露さえしのぎかねるようなものであった」と、宣教師は報告している。しかし宗麟が宣教師たちへ、気を遣っていることがうかがえる。その夜、わずかの玄米を、鍋釜（なべかま）がないので、青

竹の中に入れ、たき火に突っ込んで炊いた。むろん生煮えであるが、分け合って空腹の足しにした。

翌日は、前夜の残りの玄米をかみ、青竹で温めた水を飲んで旅を続けた。途中で宗麟は、一行の目を驚かせるような行動をとった。枯れ草をしいて休息をとっているときである。ふと立ち上がった宗麟が、数歩前に出て、家臣たちのよく見える場所でひざまずき、手の平を胸の前で合わせて神に祈りを捧げたのであった。そして「この苦悩と労苦は神に授かったものである」とそれを感謝する言葉を高くとなえた。そのあと、カブラル神父を招いて、少しばかりの米を神父の手の平に乗せ、食べるようにうながした。

宗麟が、家臣たちの面前で、あえてこのような行動をとったのは、どのような困難に遭おうとも、自分の信仰は微動だにしないことを示し、敗戦の責任をキリスト教と宣教師たちに向けようとする将兵の、不平と怒りを抑え、危害の及ぶのを防ぐ意図があったのだろうと解釈されている。

その翌日、疲れと空腹のため、一行がもう一步も前に進めないほど気力を落としているとき、数人の農夫がたき火を囲んでいるのを見つけた。近づいてみると、豆と黍（きび）と野菜を混ぜて、大きな鍋で煮ているのであった。野良仕事のあと温かい雑炊で腹ごしらえをするところなのだ。

そこで農夫たちに警戒心を起こさせないように、家臣の



一人が腰を低くして寄って行き、懇願した。

「われわれは豊後へ帰るものであるが、食べ物を食べ尽くし、空腹で困っておる。その鍋のものを半分でも売ってくれないであらうか。頼み申す」

手をつき深々と頭を垂れて頼む姿に、農夫たちも同情をし、「それはお困りじやろう。よござんす。食べて下され。われらはあとで、また炊けばよいのじゃ」

こうして思いがけぬ温かい雑炊を手に入れた。少しずつ分け合って食べ、一行はよみがえる思いであった。

宣教師たちは、この雑炊を「これはマンナのようにありがたい食物であった」と記している。「マンナ」とは、旧約聖書に「モーゼが神の選民を約束の地に導くとき、砂漠で飢えに苦しんだ。そのとき神が降らせた食物」であると説いている。

⑩ 敗戦後の難題

―― 諸将の不満聴かず ――

その日、夕闇がせまるころ、国境を越えて豊後国の土を踏んだ。

「ここまで来ればもう安心。泊まるところも食べ物も、不由することはあるまい」

一行は、ほっとする思いであった。だがすべての人が温かく迎え入れてくれるとは限らない。とある寺院を見付けて、宗麟は、一夜の宿を頼むように家臣に交渉させた。すると住職は一行をちらと見ただけで、冷たく断った。

「当寺はお泊めできません。他所へ行つて下され」

「困っておるのだ。お頼み申す。謝礼は十分に致すによって…」

「お金は要りませぬ。お許し下され」

「では、今夜炊く米を分けていただきたいが…」

「当寺には米もござりませぬ」

住職はそういつて、奥へ入ってしまった。取り付く島もない。言うまでもなく、一行の中に宣教師たちの姿を見たからである。

このように寺院の抵抗の激しさを思い知らされもしたが、豊後領内へ入ってから、恐怖心も苦勞も薄らいで、旅を続けることができた。

キリスト教理想国建設の夢はついえ、敗残のみじめな身を引きずつて帰った宗麟は、臼杵の城に直接入ることを好まず、ひとまず津久見の浦に足をとめ、この寺院を仮の宿所とした。

ここで、苦難の供をしてきた近従や宣教師たちの前で、次のように語つて、現在の心情を明かしている。

「わしは疲れた。今はただ休息したいだけだ。これからの国の統治は、義統にすべて委せよう。そうするには、今が最も好い。なぜなら、わしに反対していた重臣たちの多くは戦死したからな。わしや義統がキリシタンになろうとも、国内統治をどうしようとも、かれこれ言う者がいなくなった。——今考えていることは、この地（津久見）に教会を建てることだ。わしと、わしの身内の者の、心の安息は、神に祈るしかない」

宗麟の疲れた心身を支えているのは、神に祈ることだけであつた。日向遠征の失敗により、多くの重臣たちや将兵を失つたことへの後悔や哀悼の言葉は聞けなかつた。

宗麟は、翌年の正月早々に義統に家督を譲っている。義統は

二十二歳であった。しかし宗麟が津久見に教会堂を建てたのはそれから四年後のことであり、義統にすべてを託して隠居してしまうわけにはいかなかった。敗戦処理の難題が待ち伏せていたのである。

まず、生き残った諸将の間に満ちたのは、敗戦の責任の所在を明らかにしなければならぬという声である。

国主を惑わして、日向遠征に導いた元凶ともいえるべきは天主教（キリスト教）であり、宣教師たちの責任は免れないという声は反キリシタンの一部に出たが、最大の責任者は田原紹忍だ。日向遠征の無謀を説いて反対する家臣たちを押さえ、国主に迎合し、遠征の総指揮者となっておりながら、合戦に際しては、真つ先に逃走して生き延びておる、との卑怯と無責任への非難が集中した。

その紹忍は、敗戦のさい逃亡したまま、しばらくどこかへ身を潜めていたが、敗戦の将兵が命からがら帰国した後、ひよっこり帰って来た。そして言葉たくみに宗麟に取り入り、宗麟も国内の非難の声をよそに、また紹忍を元通り側近に置いた。

宗麟が諸將の意見を聴き、不満にこたえて、直ちに戦後処理に乗りだしていたなら、少なくとも国内のごたごたは避けられたかもしれない。日向遠征失敗の後遺症は、豊後国の土台をゆるがす事件に発展していった。





オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第十一章●大友宗麟の日向遠征 ②

2008 年 8 月 15 日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇ 著者略歴 ◇ 渡辺克己
大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十三年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。